

史遊会通信

NO. 190 年 22 日 6
平成 成 月 6 日
9 月 9 日 行 発

事務局
03--3712
0651
下山田方

七月講演趣旨

源氏物語

小田 絃一郎

一、序

源氏物語は、一〇〇年前、紫式部とい
う女性によって書かれた長編小説である。
四〇〇字詰め原稿用紙で二三〇〇枚、瀬戸
内訳によると文庫本一〇冊になる。

登場人物は五〇〇人近く、期間は実に七
十五年（四代の帝）に及び、それらが縦横
に織り成されたスケールの大きさである。
和歌も七九五首入っている。

内容は、光源氏の恋愛物語だと言われて
いるが、多岐にわたり幅広い内容を含んで
いる。全ての人間関係（男と女、男と男、
女と女）が語られており、恋愛のみならず
夫婦関係と言った点からみても実に面白い。

そこには、栄古盛衰や無常の人生が描かれ、
人間の価値、人生の意味等について考えさ
せられる。当時の政治的、経済的、社会的
な事情を背景にそこに生きる人々の喜びと
悲しみ、苦悩が語られており、心理描写は
素晴らしい。又、自然描写も優れ歳時記の
ようである。評論（小説論、教育論、女性
論、音楽論、春秋優劣論等々）も多く含ま
れている。日本が世界に誇る文化遺産であ
り、後々の文学や芸術への影響は大きく、
日本人の生活に深く関わっている。

二、構成

物語は五四卷（帖）より成っている。通
常は第一部（桐壺〜藤の裏葉）の源氏の栄

例会のお知らせ

◎ 9月例会

日時 平成22年9月22日（水）

午後6時〜8時

会場 目黒区民センター 7階

社会教育館 第2研修室

講演 中山喬央氏

テーマ 奴国から邪摩堆へ

自由執筆は鍋屋次郎・隆 恵

高橋由貴彦の諸氏。

締切りは9月30日。

◎ 10月例会

日時 平成22年10月27日（水）

午後6時〜8時

会場 目黒区民センター 7階

社会教育館 第2研修室

講演 柴田弘武氏

テーマ 未定

自由執筆は新井 宏・島津隆子

中山喬央の諸氏。

締切りは10月31日。

華、第二部（若菜上幻）の悲劇、第三部（匂宮）夢の浮橋）は、源氏亡き後の世界と分けられるが、青年期、中年期、晩年期、亡き後として読むと分かり易い。

三、特徴

特に人間造形に優れている。主人公光源氏は大政治家でありかつ大教養人、趣味人、文化人でもあるが、女性好きでもあり多くの恋愛をする全き人間である。一方で若い頃より出家を志す等苦悩の人でもある。須摩に自ら流れて行った後、政界に復帰（濡標）壮大な六条院を造営し、多くの女性達を四季の町に住まわせ榮華をほしいままにする。中心をなす玉鬘十帖（玉鬘）真木柱）は、春夏秋冬の移ろいをバックに若い女性に恋する中年の恋であり、又玉鬘の生き様が描かれており興味がある。晩年（若菜上以降）は前年の榮華とは対照的に悲劇と苦悩に見舞われた人生を送る。又、多くの女性達が登場する。光源氏に愛され光をあてられながら喜び悲しみ、苦悩し生きている個性ある女性達が多く、今の時代にも立派に通用すると思われる。宇治十帖に登場する大君は結婚拒否の女性として有名である。浮舟は、出家として救済される。

物語を読む際のポイントの一つは、対照ということである。生と死、男と女、人間と自然、肉体と精神、喜びと悲しみ、老と若さ、光と影等々、重層的に幅広い視点から描かれている。又源氏物語ほど死を語った小説はないのではないか。光源氏の死が語られるはずの雲隠の巻は内容がない。これまで語られた光源氏の人生を読者がそれぞれ思い描いてほしいと言う作者の意図なのであろうか。

二つは、一対二と言うことである。男の一に対し女の二ということは良くあることであるが、女一に対し男二というケースが多くなるときに気付かされる。藤壺、空蝉、藤月夜、女三の宮、浮舟といった主要人物のこの一対二という関係をどう理解したらよいか。とにかく物語はリアルで面白い。原文の難しくはあるが美しいのは、いくらか名訳でも及ばないであろう。声を出して読むとその内容の深さと共に味わいがあり失われている日本語の美しさを再認識させられる。又、和歌を諳んずるのもぼけ防止になる上に物語をよりよく理解する上で大事なことである。

又、女性と季節と花がびったり合わされ

ている。例えば、紫の上は春、桜である。作者は特に冬が好きであって多くの名場面の背景に冬を登場させている。明石上は、冬、梅である。

四、結び

源氏物語の本質は「もののあわれ」であると言われている。滅びゆくものの美しさへの賛美であろうか。我々の日常がえてして機械文明に影響され無味乾燥になつてい現在、このような古典に接しその美意識を学ぶことはより豊かに生きていく上で非常に大切な事ではなからうか。感性が鈍っている時、これらの豊かな広大な世界に浸っていくことは、生きていく上で非常に有益なことであり大事なことなのではないか、と思つて七年余り、かなり真剣に原文に忠実に深く考えながら時間をかけて読んでいたが、よむ度毎に新しい発見があるのはやはり古典であり、楽しみである。これからますますと読み続けたいと思つている。

（招待講師）

自由執筆

北総の内黒土器

柴田 弘武

私は本会編の『歴史に魅せられて』の中に「北総とえみし」という論考を載せてもらった。その中で香取市（元佐原市）大倉の側高神社の「ひげなで祭り」を取り上げ、それがイクパスイ（ひげをかき上げる筈）こそ使わないものの、現在もアイヌが行う「神への祈り」の儀式にきわめて似ていること、また同神社には蝦夷から馬二〇〇〇疋を奪ってきた伝承などがあることを取り上げ、これらは同地に移配された俘囚（えみしの捕虜）の名残ではないかと指摘した。そして大倉にある「えぞ」「イソ」の小字がそれを伝えているとし、彼らは同地周辺において製鉄作業に従事させられたものであろうと論じた。

ところでその後二〇〇九年十一月に側高神社を再訪したおり、偶然同社氏子の多田猪一郎（屋号代官）という方にお会いし、話を聞くことができた。同氏は「私の所有地内からは旧石器、縄文土器、弥生土器、土師器などの破片がよく出る」という。私

は「その土器の内側が黒くなったものはありませんか？」と聞いた。多田氏は「ありますよ」と言うではないか。私は驚いた。

内黒土器（土師器）というのはえみし特有の土器で、東北地方にはよく出土している。吉村武彦著『古代天皇の誕生』の「斉明朝の石神遺跡」の項にも、「石敷きの井戸を中心とした東の区画から、器の内側が漆黒色である土器が出土している。陸奥でつくられた蝦夷の土器で、つまり、蝦夷がこの内黒の土器を運んできて、何らかの饗宴が行われていた場所ということになる。『日本書紀』の記述を跡づける発掘成果である」と書かれている。

しかも同氏は「たたら跡らしいものもある」という。私はあまり予想が当たるのに愕然としたが、その時はある団体を引率していたので、後日確認させてもらうことにしてお別れした。

二〇一〇年二月、私は多田氏宅を訪問した。氏の家は側高神社の南一キロほどの所で、「えぞ」「イソ」との間であった。氏は私を座敷にあげ、出土品を並べた箱を見せてくださった。まさしく旧石器から土師器までの石器や土器の破片が何点かずあった。縄文土器などは全く珍しい形をし

ていたし、弥生の壺はほぼ完形に近い見事なものである。そして内黒土器である。ほぼ完形に近い杯と破片三点であった。黒色が大分薄くなっている。内黒土器と断定するにはやや心配が残るものであった。

その後同氏は自宅前の山林（小字前山）に私を案内し、南斜面の一部を鍬で掘ってくださった。間違いなく鉄滓が掘り出された。大きさは人の拳半分ほどのもので一点ほど出土した。「千葉県の遺跡」にも全く登録されていない。私は写真を撮り、鉄滓数点を頂いて帰宅した。

その後今年六月に入って、同氏から新たに内黒土器を発見したという電話が入った。七月になって私は同氏宅を訪れた。今度の土器破片は三点、そのうち一点は壺状のもの、その底の部分で、その内側はそれこそ漆黒に塗り固められていて、間違いなく内黒土器（土師器）と認められるものであった。氏は私に教えられなければ捨てるどころだったと笑って、その土器を私にくださるという。私はしばらく預からせてもらうことにして、必ず返す約束をして別れた。私は仮説が実証された、と思い満足だった。

自由執筆

「苦学生」減って国亡ぶ

鯨 游 海

三十年程前のこと、功成り財も成した或る開業医に私は同窓の宜もあつて学生時代のことを尋ねたことがあつた。彼は急に顔を歪め「あの貧しく厳しかった頃のことは想い出したくもない」と、苦し気に答えたのが今でも妙に印象に残っている。戦争直後の昭和二十年代前半に学生々活を過ごした世代である。その頃は学生に限らず日本中が貧しく厳しい飢えに直面していたのであるが、特に東京、大阪の大都会で下宿中の医学生には学問修得の厳しさと生活との二重苦だったろう。一瞬肅然とさせられたのを覚えてゐる。戦後のこの時期私は未だ親がかりで浮世の寒風は間接的であつた。思えば殆んどどの学生が苦学生だったような気がする。所で近年は苦学生を見かけなくなつたし、その言葉すら死語となつてきた。

当時の学生は皆黒い詰襟服で学生帽を被つていたので、一目で社会人と区別出来た。外人が「日本には何故こんなに鉄道員が多いのか」と訝つたという。日本も豊かにな

り奨学金制度も充実し、アルバイトで稼ぐのも容易となつた。また質はともかく大学も大学生も飛躍的に増えた。これはハッピーな現象なのか。

最近面白い経験をした。

私の勤務する会社では当局の要請もあり、薬学部のある五人を三ヶ月余職場実習で受け入れた。最近始まった新制度で、薬学生には必須の研修らしい。さて、五人の学生個別に面談する機会があつた。何れも明るく健康的で頼もしい若者たちである。言動からも裕福な育ちにみえた。実際私大薬学部六年間に要する費用は一千万円といわれているので平均以上の家庭の子弟なのだろう。私は少し意地悪い質問を試してみた。

「苦学生とはどういう学生をいうのか」と。

予想通りというべきか驚いたことにといいうべきか正解は唯の一人。他は判らないといふ。そこで①講義が難しく学問に苦しんでいる学生②働らいて学費や生活費を得るのに苦しんでいる学生のどちらかを選ばせてみた。四人共①と答えたのである。嗚呼。今も苦学生は居るのだろうか見かけ上は激減した。実体が無ければ当然言葉も亡びる。然し「罪と罰」「金色夜叉」とはいわずとも読書さえしていれば、苦学生の意味

位は知識として判る筈である。彼らは碌に読書もしていないのであろうか。

「女子学生亡国論」が一頃話題となつた。嫁に行くお嬢さんに国費を使うことへの疑問であつた。学問への志や厳しさを自覚せずお茶やお華や料理を習う感覚で、唯大卒の肩書きを求めた女子学生が国立大に居たのも事実であつた。女子の成績が良く入試で男子が排除される現象もあつたらしい。

もとより国民一般の教育レベルが上るのは好ましいことである。しかし事情は一変した。大学の国際間競争が激しくなり、今の予算では日本の大学の研究レベルが低下するばかりという。一方で法科大学院の惨状はどうか。当局の無策無定見は糾弾されるべきだ。所詮この社会は能力ややる気の有無による選別は不可欠で、限界的な大学や大学生には退場して貰う仕分けは必然不可避である。平等が全てに勝る善ではない。

螢雪の功とは晋書にある逸話で「家貧しく油無し」なので、螢や雪の明りで読書し、のち晋の名宰相や高官に大成した二人の苦学生を称えた故事である。日本は阿倍、福田、麻生、鳩山と四代続けて螢雪の功無き人物を宰相に選んで失敗した。螢雪の功ある苦学生が減り確実にこの国は劣化した。

自由執筆

次郎長と三人のお蝶

太田 精一

清水次郎長は、生涯に三人の女房を娶り、いずれもお蝶と名乗っている。最初の女房は、旅先で病死。次の女房は、自宅で斬殺された。三人目は、次郎長を看取り、大正時代まで長生きをして、菩提を弔っている。三人のお蝶は、生い立ちも、性格も異なる。だが、三人ともそれぞれの局面で、次郎長の活躍を陰で支え、彼を大きく世間に押し出した。

次郎長は、駿河の国清水湊、美濃輪稻荷鳥居前の船持船頭、三右衛門の三男として文政三年（一八二〇）元旦に生まれた。

近所で米屋をしている妻の弟夫婦、次郎八に子がなく、跡継ぎを欲しがっていたので、そこに養子に出されることになった。三右衛門は、この三男を長五郎と名付けた。だが、養子に出されてからは、次郎八のところの長五郎と呼ばれ、それが詰まって次郎長と呼ばれるようになった。

次郎長は、当初、米屋を継いで家業に励んでいた。だが、天保十二年（一八四一）

八月、米屋に四人組の強盗が押し入り、そのうちの二人を撲殺してしまった。その罪を逃れるため、国許を出奔、三年後に故郷に戻って来た。三年の旅は、次郎長を、すっかり変え、渡世の道へと走らせることになってしまったのである。

次郎長は、国許に戻るとすぐ所帯を持った。相手は、江尻の侠客大熊の妹、お蝶である。故郷に腰を据えた次郎長の許には、旅人や大勢の子分が集まり、清水の親分とか次郎長兄貴とか言われるようになっていた。

親分肌の次郎長は、面倒見がよい。そのため、四、五十人の子分や旅人が、いつも出入りしていた。一飯で一斗の米を炊くという日々が続き、女房のお蝶にとって、そのやりくりが大変であった。

そうした生活が十年以上続くうちに、次郎長は、次第に東海道の親分としての名声を得た。その矢先、渡世のいざこざから甲府の親分猿楽勘助をお蝶の兄の江尻の大熊と共に討つ破目になってしまった。そのことで手が廻り、お蝶と共に三河に逃れた。

それがいけなかった。お蝶は、旅で散々苦勞したため、尾張瀬戸の岡市で病に倒れ、安政六年（一八五九）正月、名古屋の貸元

長兵衛宅で息を引き取った。旅先とはいえ、清水次郎長の女房の葬式とあって尾張、伊勢、三河から五、六十人の親分衆が集まり、盛大に行われたと伝えられている。

二番目の女房のお蝶は、江戸で芸者をしていたという。次郎長が女房としたのは、その氣風きかぜに惚れ込んだようだ。

明治二年（一八六九）九月二十二日、清水湊上丁の屋敷で、お蝶が斬られた。折悪しく、次郎長は所用で、三河に出掛け、留守を預かっていた大政、仙右衛門、啓次郎なども皆出払っていた。

切った武士は、徳川家の新番組の隊士小暮半次郎であることが分った。小暮は、江戸にいた頃、お蝶の馴染みであったという。この日も小暮は、酒をこたま飲んで、昔馴染みのお蝶の所に訪ねて来たのである。

しかし、お蝶は、すでに次郎長の女房になっっていることから、相手にしなかった。かっとなった小暮は、毅然としてお蝶を斬殺したのである。

帰ってきて惨状を見た子分たちは、久能山の新番組のもとに逃れようとしている小暮を山の近くの田圃道に追い込み、啓次郎が討ち果たした。啓次郎は、国定忠治の孫で次郎長を慕って清水に来て弟分になった

人物である。お蝶は、小暮を討ち果たしたと聞くとにっこりと頷いて旅立った。

二代目のお蝶が、切られて亡くなった後、次郎長は、三州西尾藩士篠原藤吾の娘を迎えお蝶を名乗らせた。三代目お蝶である。

扶持を離れた浪人、劍客や渡世人が明治になっても次郎長を頼って来た。二、三十人がごろごろしている。これを世話するのがお蝶の役目であった。

西南戦争が終った明治十年頃から、清水にも、文明開化の波が押し寄せてきた。次郎長もその波に乗り、清水の波止場を近代化し、蒸気船を建造しようと盛んに回漕問屋を説いて廻った。この説得に応じた問屋が静岡商人の力を借りて、静龍社という会社を興した。同社は、蒸気船を建造し、お茶などの県産品の積み出しに多大な貢献をした。

また、次郎長は、富士の裾野の開墾も手掛け、その開墾に囚人を当たらせている。現地に山小屋を建て、百人近い囚人を収容した。次郎長は、囚人たちを一般人と同じように扱った。特に拘束は、しなかった。家の近い者には、時折、妻子の許に土産を持たせて帰したこともあったという。

お蝶は、親のように慕われている次郎長

の女房として囚人の面倒をよく見た。夫が留守で、大勢の囚人の中に一人でいる時などもまったく心配している様子はなかったようだ。

開墾地には、茶、桑などが植えられ、七、八十町歩にも及んでいた。

明治十九年春には、次郎長は、美濃輪の家を波止場に移転し、大きな家を建てた。

そこで「末広」の看板を掲げ、料理屋兼汽船宿を始めている。商売は繁盛したが、困っている人を見ると放っておけない。頼って来られる旅人には、ただで泊めてやる。その上で、小遣い銭や着物を与えた。そのため、出費は嵩んだ。

大勢の子分、食客、旅人に囲まれ、お蝶は、この時代になってもやりくりをしななければならなかったのである。

明治二十六年晩春、次郎長は、開墾地に植える芋の種を裏の畑に播いていた。雨が降ってきたので、お蝶が、畑に迎えに出た。次郎長が、もう少しで終わると言って手を休めない。冷たい雨に濡れながらお蝶も播き終わるまで手伝った。

家に帰った途端、次郎長は、高熱を出し床に伏せた。数日後、食がのどを通らなくなり、お蝶に看取られながら、七十四歳

の波乱に満ちた生涯を閉じた。

骨は、下清水の臨済宗海蔭寺かいいんじに埋められた。侠客清水次郎長の死とあって、葬儀は盛大に行われた。全国に生き残った親分衆が集まって、その数五千を超えたと伝えられている。

一周忌に当って、お蝶は、農商務大臣の榎本武揚に石碑の揮毫を依頼した。榎本は、即座に快諾した。次郎長の好んだ自然石に「侠客次郎長之墓」と刻んだ墓碑が今でも残っている。

次郎長の死後、お蝶は、彼が最後に取り立てた当目の岩吉こと久保山岩吉を頼りにし、何くれとなく相談している。頭もよく、次郎長を敬慕し、義理人情にも厚かった。

岩吉亡き後、お蝶に忠実に仕えたのは、静岡の加藤市五郎であった。彼は、明治五年に大政を頼って子分になった。清水一家最後の侠客で、次郎長や大政の亡き後の祀りを怠らなかつた。

三代目のお蝶は、大正五年に、八十一歳で永眠した。

次郎長が、華々しい一生を全うすることができたのも、青年、壮年、熟年のそれぞれ局面で、三人のお蝶の陰の力が、あったからに他ならない。

自由執筆

もう一つの「五稜郭」

— 信濃国佐久・籠岡城五稜郭 —

諸橋 奏

「五稜郭」といえば、「箱館戦争」五稜郭の戦いで、一八六八〜六九年（明治一〜二）幕臣榎本武揚らがここに拠って官軍に抵抗した戊辰戦争最後の戦場を思い浮べる。

この洋式城塞函館五稜郭は、江戸幕府が北方警備のため箱館奉行庁舎として七年をかけ一八六四年（元治一）に完成した。

函館（明治二年、蝦夷を北海道、箱館を函館と改む）の地名は、室町末期にあった河野政通の館が箱形をしていたことに由来するといふ。河野氏は伊予の豪族であったが、奥州征伐の功で陸奥国三迫に領地を得て土着、後に津軽の安東氏と南部氏との争いに絡んで、北海道に渡った。

室町中期にかけて構築された「道内十二館」に、「箱館」館主河野加賀右衛門尉政通の名が記されている。

一六四一年（寛永一八）幕府は鎖国体制を完成した。そして一七二一年（正徳一）

コザック軍が初めて千島列島へ遠征して来る。北方辺地問題の始まりである。

田沼時代、ロシアの東進政策は激しく、老中意次は辺境政策にも意欲的で「蝦夷地開発計画」を作るが、志半ばの一七八六年（天明三）失脚。

一八世紀末からは欧米列強も加わって来るに及んで、幕府は一八二五年（文政八）「異国船打払令」を発するが、アヘン戦争（一八四〇〜四二年）でこれを撤廃した。

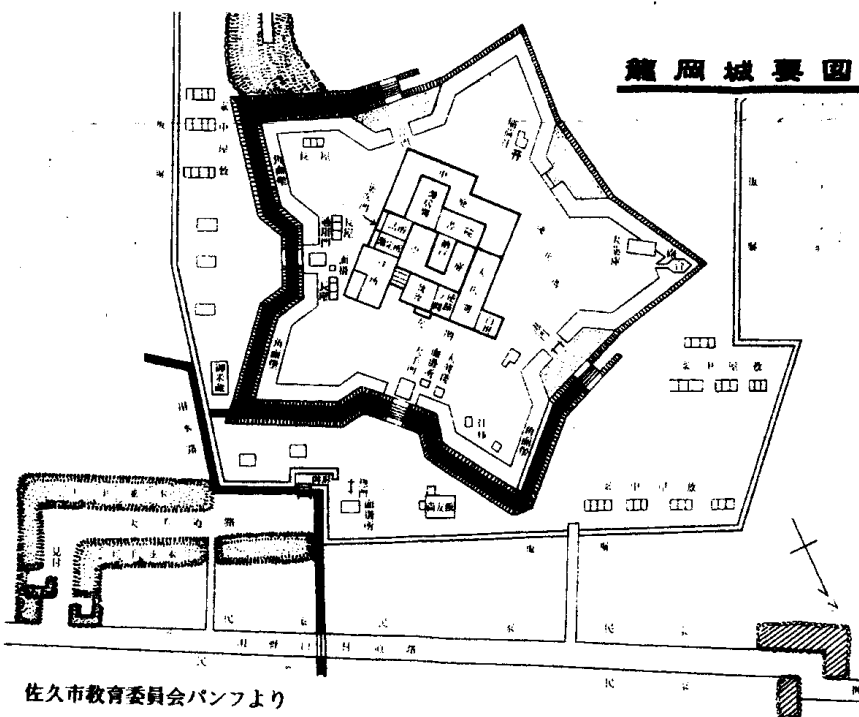
とはいえ一方で「台場」砲台を沿岸線に構築する。

新潟港を例にみると、一八四〇年（天保一一）の「三方領地替令」の撤回につづく「上知令」の撤回（一八四三年）で、幕藩制の衰退は顕在化するが、長岡藩に命じた「新潟上知」だけは、六月一日「抜け荷摘発不十分」の廉で実行された。

六月一七日、老中水野忠邦から「北海防禦の台場づくり」の特命で、砲術家川村清兵衛修就が初代新潟奉行（異名大砲奉行）に任命される。

修就は、一八四七年（弘化四）には

籠岡城要図



「台場と灯明台」、続いて「武器蔵と火薬蔵」を完成させ異国船の襲来に備えた。幕末のかかる内憂外患急を告げる最中、海から最も遠い内陸の信濃国佐久郡田野口村（現在佐久市田口）に「五稜郭」が築城される。

築城者は、大給松平氏奥殿藩最後の藩主

松平乗謨のりたかで、幕末に老中格・陸軍總裁を務めた人物。乗謨は一八三九年（天保一〇）生まれで、若くして蘭学・仏語・洋式兵学を学び、鎖国政策による国際法や軍備のお

祝出版

★瀧澤中著

12歳から大人まで

政治の基礎の基礎が

よくわかる本

大和書房

定価（一六〇〇円＋税）

★三戸岡道夫編

二宮金次郎から学んだ

情熱の経営

栄光出版

定価（一四〇〇円＋税）

くれを痛感、国家存亡の危機を憂い、フランスのボーヴァン元帥が一七世紀に考案したあこがれの、星形稜堡を有する五稜郭の平野での築城を志したもののようである。

乗謨は一八六三年（文久三）正月、本領三河から信州領への移転を機に、「新陣屋五稜郭建設」を幕府に出願申請、併せて藩名を「田野口藩」に改名。六月に「陣屋絵図」を公儀に提出して許可され、翌元治元年三月、龍岡の地に着工、一八六七年（慶応三）四月に竣工した。

ところが、竣工翌年に明治となり、乗謨は新政府から謹慎を申し渡されてしまった。しかし「北越戊辰戦争出兵」の功により赦免され、その機に「田野口藩」を「龍岡藩」と改称し、乗謨自身も「明治」になるや、松平から大給おききょう恒と改姓している。

かかる数奇から「龍岡五稜郭」は函館とともに「わが国にただ二つ」という貴重な史蹟であるのみならず「日本最後の城郭」の名を恣にし、最近「地上の星」とロマンを籠めて呼ばれているようである。

ただ二、三の疑問が残る。何故代々城持ち資格のない「陣屋格大名」に築城許可が下りたのか、而も沿岸防禦と無縁の海岸線

最遠隔地に築城の要があったのか（砲は北西向き）。また、出願の一八六三年は「下関事件・薩英戦争」の起った年、幕府は危急の際にあったことを思うと、不思議でさえある築城である。
(友の会)

事務局だより

※会員の活動

▼柴田弘武氏

雑誌『怪』VOL.030 執筆

「別所・俘囚・鉄」

▼三戸岡道夫氏

雑誌『歴史通』9月号 執筆

〈特集 江戸・幕末のリーダーたち〉

「二宮金次郎」

※11月からの講演者と自由執筆者

11月	講演者 新井宏氏	執筆者 会員と友の会員
12月	忘年会 「原稿作成とインターネット」	「今年感動した三冊の本」
1月	山本鎮雄氏 題未定	未定 佐藤氏 森下氏・千坂氏